短 報

副腎皮質癌の1例

—その穿刺吸引細胞診所見—

広島市立安佐市民病院病理部

田中 信利 安松 弘光 若林 信浩 江川 博彌
林 雄三

I. はじめに

副腎皮質癌は、きわめてまれな腫瘍でその頻度は悪性腫瘍中の0.17%といわれている¹⁾。したがってこの腫瘍の細胞診所見の報告もまた、きわめて少ない。

今回われわれは、このまれな副腎皮質癌症例を検索する機会を得たので、その穿刺吸引細胞診所見を中心にして報告する。

II. 症 例

患 者：48歳，女性

主 訴：特になし

現病歴：成人病検診にて左側腹部の腫瘍を指摘され、当院外科を受診。入院時の生化学的検査では、特に異常は認められなかったが、CT、超音波検査およびangiographyにより副腎の腫瘍と診断された。その後、超音波誘導による左側腹部腫瘍の穿刺吸引細胞診が施行され、そして腫瘍の摘出術が行われた。

穿刺吸引細胞診所見 (Papanicolaou 染色)：標本の背景には多数の赤血球がみられ、その中に小型の異

型細胞が孤立散在性にあるいは、結合性の疎な小集塊として多数認められた。異型細胞1000個を計測すると大多数は細胞の長径が10~16 μ (平均13 μ)、核の長径が7~10 μ (平均8 μ)であった。これらの異型細胞はN/C比が比較的小さく、細胞質は小空胞状かあるいは泡沫状を示していた。核形は類円形を示しクロマチンは細顆粒状~粗顆粒状で軽度の増量を示し、著明な核小体を1~3個認めた。そのほかに核の偏在と核形不整を示すもの、核の大小不同を示すもの、細胞膜と核膜が一部で接する像もみられた (写真1)。核分裂像はみられなかった。以上より異型細胞の異型性は乏しく、核分裂像もみられなかったが、細胞間の結合性が弱く一部に核形不整な細胞や核の大小不同を示す細胞がみられたことより、良悪性の鑑別は困難であるとした。

写真1 穿刺吸引細胞診 (Papanicolaou 染色, $\times 1000$)

異型細胞は、核の大小不同を示すもの (写真左)、核の偏在と核形不整を示すもの (写真右)、細胞膜と核膜が一部で接する像 (↓) を示すものがみられる

Fine needle aspiration cytology of adrenal cortical adenocarcinoma : A case report

Nobutoshi TANAKA, C.T., I.A.C., Hiromitsu YASUMA-TSU, C.T., I.A.C., Nobuhiro WAKABAYASHI, C.T., Hiromi EGAWA, M.D., Yuuzo HAYASHI, M.D.

Department of Pathology, Hiroshima Asa Civic Hospital
論文別刷請求先：〒731-02 広島市安佐北区可部南2の1の1
広島市立安佐市民病院病理部 田中 信利

平成5年3月5日受付

平成5年9月3日受理

写真 2 病理組織像 (H-E 染色, ×400)

- a: 腫瘍細胞は、円形の核と多数の小空胞をもつ広い細胞質を有する
 b: やや大型で軽い大小不同を示し、核小体の目立つ核をもつ腫瘍細胞からなる部分。一部に、核分裂像(↓)もみられる

病理組織学的診断: 摘出された左側副腎の腫瘍組織は重量 1810 g, 大きさ 18×14×10 cm 大で被膜を有していた。腫瘍の組織像は、腫瘍細胞が不規則な胞巣状のパターンを示しながら増生し、間質は少量の線維成分と小血管より成っていた。一部には、出血像や壊死像もみられた。この腫瘍細胞は、円形の核と比較的多量の細胞質をもち、これら多くの細胞が、細胞質に多数の小空胞を有していた (写真 2a)。部位によっては、核の大小不同が目立つ部位や、核小体の目立つ大型の核を有する腫瘍細胞から成る部分がみられ、核分裂像も少数ではあるが認められた (写真 2b)。組織化学的には小空胞をもつ細胞は、Oil red O に陽性であった。免疫組織化学染色では、表 1 に示すように、Vimentin が陽性を示す以外はすべて陰性であった。以上の諸所見から副腎皮質癌と診断された。

III. 考 察

副腎皮質癌の穿刺吸引および捺印細胞診所見についての諸家の報告²⁻⁵⁾をまとめると、① 細胞の結合性が弱い、② 細胞膜と核膜が一部で接する像がみられる、③ 核は、類円形～卵円形で核形の不整、核の切れ込み、核縁の肥厚がみられ、核の大小不同が著明である、④ 多核巨細胞がみられる、⑤ クロマチンは細顆粒状～粗顆粒状、⑥ 核小体は 1～数个認められる、⑦ 核分裂像がみられる、⑧ 核内封入体がみられる、

表 1 腫瘍細胞の組織化学および免疫組織化学的所見

PAS	—
Oil red O	+
Vimentin	+
cytokeratin	—
keratin	—
CEA	—
AFP	—
S-100	—
Lysozyme	—
Desmin	—

⑨ 壊死様物質がみられる、などの所見があげられている。これらの所見と本症例を比較してみると、本症例では多核巨細胞、核分裂像、核内封入体あるいは壊死様物質は認めなかったが、その他の所見はほぼ一致していた。次に副腎皮質腫瘍の腺腫と癌との鑑別は、組織診においてもしばしば困難なことがある。したがって、細胞診においても困難な場合があるが諸家²⁻⁵⁾が述べる細胞学的鑑別点としては、癌の場合は核分裂像、多核巨細胞、核形不整な細胞あるいは壊死物質の出現がみられることを強調している。本症例の細胞診所見では、核形不整な細胞がみられたが、そのほかの所見はみられなかった。

したがって、副腎腫瘍において前述の腺腫と癌との鑑別点のうち 1 つでも当てはまる所見がみられたならば副腎皮質癌の可能性を考慮する必要がある。

本論文の要旨は、第 31 回日本臨床細胞学会秋期大会学術講演会において発表した。

文 献

- 1) 田村 泰・他: 副腎皮質癌の臨床, 癌の臨床, 20: 839~845, 1974.
- 2) 福田正彦・他: 内分泌非活性型副腎皮質癌の 1 例, 日臨細胞誌, 27: 414~418, 1988.
- 3) 鈴木君義・他: 副腎皮質癌の 1 例, 日臨細胞誌, 27: 1011~1015, 1988.
- 4) 及川守康・他: 副腎皮質癌の 1 例, 日臨細胞誌, 29: 535~538, 1990.
- 5) Levin, N.P., et al.: Fine needle aspiration and histology of adrenal cortical carcinoma: A case report, Acta Cytologica, 25: 421~424, 1981.